

編集後記

この後記は第20回日本リハビリテーション医学会の直後、ほっとした状態で書いている。今回の学会も大盛会でしかも学ぶところが大変多く、祖父江会長をはじめ学会の運営に当られた方々の御苦勞に感謝したい。

さて本号は専門医と認定医に関する特集である。他の学会の専門医・認定医制度と比較するとスペシャリストとエキスパートの2つを併せ持った形式としてユニークなものであるが、この事は医学の各分野のリハビリテーションに興味を持つ人々の集りとして出発した当学会の歴史的背景を示すものであろう。その中でリハビリテーション医学やリハビリテーション専門医のあるべき姿が繰返し検討され論議されて2度の総会議決の中でどうにか生れた制度だけに発足してからスナリと事が運んでいるとは言い難く、岩倉委員長の御苦勞も並大抵のものではないと思われる。

専門医・認定医の姿と言っても誰もが同じ像を持っているわけではなく、認定医について例えてみれば、ある人はリハビリテーション医学を長く実践し豊かな体験を持つ人、また他の人はそれに加え指導者としての能力や実績をも考えに入れるかも知れない。いずれにせよこの号がその意味で学会が専門医・

認定医に対してどのようなイメージを持っているかが理解される事の一助になればこの上もない幸せである。

特集の内容では岩倉氏により制度の説明を、石田氏には諸外国との比較、安藤・緒方両氏には初回の選考について、さらに初回に認定された諸氏の所感、私はガイドラインの説明と私達のところで行っている研究プランについて説明した。

当誌への研究論文の投稿が次第に増加し、その内容も充実したものとなっていることは衆目の一致する所であろう。

今回は山本氏、窪田氏、二木氏の労作を掲載する事ができた。本誌は学会誌とは異り年12冊発行されるので、そのことも御考え合せの上、多くの投稿をして下さるよう御願います。

2編の講座に加え IRMA IVに参加された方々の座談会は大変興味深く読ませていただいた。今村氏はセミナーを担当されるなど各氏の御活躍に拍手を送りたい。今後は育ちつつある若手の国際的活躍もさらに望みたい。

天候不順の折から読者の皆様の御自愛を心から御願ひし編集後記の終りとする。

(明石 謙)

編集顧問

天 児 民 和
大 島 良 雄
小 池 文 英
杉 山 尚
砂 原 茂 一
津 山 直 一
水 野 祥 太 郎
土 屋 弘 吉

編集委員

明 石 謙
上 田 敏
緒 方 甫
大 井 淑 雄
大 川 嗣 雄
千 野 直 一
横 山 巖

編集同人

赤 津 隆
今 田 拓
今 村 哲 夫
江 口 壽 榮 夫
小 川 孟
荻 島 秀 男
加 倉 井 周 一
賀 集 竹 子
河 邨 文 一 郎
小 島 蓉 子
五 味 重 春
齊 藤 正 也
笹 沼 澄 子
澤 村 誠 志
高 田 玲 子
高 橋 勇
武 智 秀 夫
土 屋 和 夫
永 井 昌 夫
中 村 隆 一
野 島 元 雄
野 村 欲
橋 倉 一 裕
長 谷 川 恒 雄
林 玉 子
福 井 園 彦
松 村 秩
三 島 博 信
矢 谷 令 子
渡 辺 英 夫
(五十音順)

(細田, 山田)

次号予告 (第11巻 第8号)

特集 高次脳機能障害 (その1)

高次脳機能障害とリハビリテーション医学……………東大 上 田 敏
歩行の失行……………自治医大・神経内科 水 野 美 邦
構成失行……………中伊豆リハ 三 島 博 信
半側空間失認……………七沢病院 福 井 園 彦
<症 例>
家事自立に至った左半側空間失認の1例……………横浜市大 足 立 徹 也・他
右片麻痺患者に認められた右半側空間
失認の2症例……………国療・東京病院 野 手 と し 子
視覚失認の1例……………福岡市心身障センター 野 崎 小 枝
視覚失認を呈した一症例とその家庭復帰
について……………耳原鳳病院 大 松 慶 子・他

巻 頭 言 心：傷健一家にちなんで……………神戸大・医・短大学部 坂 田 政 泰

研究と報告 脳卒中患者の障害の構造の研究

第3報：日常生活動作の構造の研究……………代々木病院 二 木 立

紹 介 シンポジウム「身体障害者と結婚」を

開催して：横浜市「障害者の日」記念事業……………横浜市大 伊 藤 利 之

講 座 CT-8 脊柱の CT(1)……………自治医大 大 井 淑 雄

上肢の機能解剖-5, 上肢動作の運動パターン

と機能：特に障害手による食事動作を中心に……………愛媛大 首 藤 貴

一 頁 講 座 スプリント 8：頸髄損傷のスプリント(その2)……………九州労災 吉 村 理